

「風が吹いても流れぬ様に」

「フワイ——」

「オイ喜イヤン、お前其處へへたつたな」

「清イヤン、何んと旨い事云ひよるな、私が見れば綺麗な碇の模様と云ふたら、風が吹いても流れぬ様にと、感心やな」

「オイ喜イヤン、お前所の婢はあんな事をよう云はんやろ」

「宅の婢かて云ふわいな、清イヤン左様なら」

「オイ喜イヤン、何處へ行くねん」

「宅へ歸つて婢に云はしたろ」

と喜イさんは其のまゝ家へ歸りました……。

「婢……」

「婢やないし、何處をヌタクツてるねン、此のノロンケツが」

「ウワ——、ノロンケツやと、今な清イヤンと二人で大

川へ涼みに行つたんや、そんなら揃への浴衣で踊つてるので私が見れば綺麗な碇の模様と云ふたら、風が吹いても流れぬ様にと云ひよつたんや、お前よう云ふか」

「そんな事位、何んでもないは」

「よし、そんなら此の前祭の時の碇の模様の浴衣があつたやろ」

「もう汚れて着られへんさかい、押入れへつゝこんだある」

「偉い、それを出し、かまへん、船が無いさかい、そのタラヒの中へ這入つて踊り、私は橋の上と……天窓から眺見たろ……いやう——汚ないなア、あら何んや、見れば汚ない碇の模様」

と云ふたら婢も粹な女で、

「質に置いて流れぬ様に」



桂 春團治論

伊 勢 三 郎

役者の後援會がその機關雜誌を作つてゐることは昔しからよく聞く。その方には縁の薄い筆者でも東京の「中村吉右衛門」や京都の「中ぼん」なら知つてゐる。落語家の方でもこうした試みがあつたかどうか、寡聞な筆者はたゞかつての「春團治」より他のを知らない。そう云

へばこの「上方はなし」だつて元は松鶴後援會の機關雜誌としてその一步を踏み出したものだつた。この點では春團治の方が一寸先輩格である。この「春團治」が何號まで續いたかしらぬが、春團治がこんなものをやつてみ

る氣になつたのが面白い。松鶴の場合は上方はなしとのつながりが左程おかしくはないが、彼の場合には一寸ばかりおかしそぐはぬ感じである。彼には雜誌の「春團治」より呑み屋の「春團治」の方がしつくりとした身に合つたものゝやうに思へるが如何なものだらう。

扱て枕はこれ位にして本題に入るが、今日吉本の落語家の中で一番重寶な存在は云ふ迄もなく春團治であらう。然も後にも先きにも賣りものとして百パーセントの價打をもつ落語家としては今彼の右に出るものは見當